

感染症リスク管理における生物多様性保全の意義

五箇 公一

国立研究開発法人 国立環境研究所 生物多様性領域（生態リスク評価・対策研究室）室長

病原体微生物やウイルスは、生態系の構成要素であり、共進化の歴史を経て、特定の宿主と固有の相互関係を構築している。病原体が自然界から他の地域に流出すると、免疫や抵抗性を持たない新たな宿主と遭遇し、「新興感染症（EID）」として急速に蔓延することになる。SARS-CoV-2のパンデミックを機に、生物多様性の破壊や人為的環境変化がEIDパンデミックに深く関係しているとする研究及び議論が注目されている。本講演では、EIDリスクを環境問題として捉え、新たなパンデミック回避のための自然共生のあり方について論考する。